■ マンガで見る始興100年史

歴史の縮小版、戸曹原

浦洞と下中洞の間にある戸曹堤防は壬辰倭乱(文禄・慶長の役)と丙子胡乱によって窮乏していた民を助けるため、干潟を農地に開墾する目的で築かれた堤防。
旧国道39号線に行けば堤防の跡が確認できる。

その下の物旺貯水池と鞍峴洞キルマジェの間にある戸曹原は堤防を築いてから干潟を開墾した農地。戸曹堤防は1721年の景宗元年に完成した。

築造を管理したのは当時、戸曹賑恤庁堂上官を務めていた仁顕王后の兄、閔鎮遠である。

承政院の記録によると、戸曹堤防の築造後、実務責任者であるユ・ドッキらに対する処罰の話が持ち上がり、堤防の撤去を求める奏上文まで出された。

奏上文の内容とは…

干拓後の戸曹原には棚田と今はなくなってしまったが梅花洞の横を通る大きな水路があった。戸曹原は秋の収穫が終われば水路を閉ざしたという。

日本統治時代には収穫後の農閑期に戸曹原に溜まった水に棲む魚を捕って南大門市場で売ったりもしたという。

秋から戸曹原に水が溜まり始めて冬には凍ったので戸曹原の上で氷上ソリに乗って遊んだりもした。

春には氷が溶けて戸曹原一帯は巨大な貯水池に変わった。
本格的な農繁期が始まると堤防の水路に積み上げておいた叺(かます)を一つずつ取り去って水を抜き、地面が露出した田に苗を植えた。

戸曹原は穀物と人、数多くの生命が共存する生命共同体だった。

もし景宗王が長生きして長い間在位していたとすれば、戸曹堤防と戸曹原は現在まで残っていただろうか？
景宗王が崩御して閔鎮遠が属していた老論派の支持を受けた英祖が即位したからこそ、戸曹堤防も戸曹原も今日に至っているのではないだろうか。

朝鮮後期に党派争いの真っ只中でも粘り強く生き残った戸曹原は約300年にわたる始興の人々の魂と歳月が溶け込んでいる人生そのものである。

歌による癒しと
ふれあい
オウルリム合唱団

「82歳の年で合唱団員になれてどれだけうれしいことか」「車椅子で通っていますが、練習の日が待ち遠しいです」

昨年12月に結成された「始興オウルリム合唱団」は障害者や一人暮らしの高齢者、国際家庭、才能寄付者など、幅広い市民で構成されている。創団メンバーは全部で55人。このうち60歳以上の高齢者は22人にもなる。合唱団を任されたクァク・クンソン団長は、初めて合唱団員を募集したとき、非常に心配したという。

心身を病んでいる人や韓国語が不十分な国際結婚移住者、お年寄りなどを一つにまとめてハーモニーを生み出すということは、一筋縄ではいかなそうに見えたためである。
しかし、それにもかかわらず、週に一度集まって練習を重ねるにつれ、驚くべき変化が起こった。一緒に交わって歌を歌っている間は痛みも寂しさも忘れ、音楽を通じて癒しとふれあいを感じる中、自然と一つになっていた。

始興オウルリム合唱団が初めて市民の前で舞台に上がった3月1日。「始興100年タイムカプセル埋設記念式」の式前行事で見せた姿は期待以上だった。花冷えのために襟元をかき合わせるほど肌寒い日だったが、彼らの歌の中には喜びと情熱が溶け込んでいた。それまで、寂しく病んでいた彼らが短い時間でも一緒に練習しながら明るい姿を取り戻したように、終始笑顔でいた。勇気を振り絞り、生まれて初めて大勢の前で最善を尽くして歌う団員を見つめる市民も、真心のこもった熱い拍手で応えた。

そして先月13日。ついに55人の団員に委嘱状を授与する創団式が行われた。一人ずつ委嘱状を受け取って胸いっぱいの喜びを満喫していた彼らは、心新たに決意した。

「私たち一人一人は不足な者ですが、皆が一つになって始興市民に美しいハーモニーをお届けします」
彼らの継続的かつ活発な活動が今後、多くの市民に感動と楽しさをたくさん届けてくれることを期待する。

深い感動で
明るい世界を作る
始興オウルリム合唱団

オウルリム合唱団は障害者と非障害者が一つになって歌い、音楽によってふれあいながら癒されていく合唱団で、始興100周年を記念してこれからの始興100年を出発するために創団されました。

「2014年始興市大規模就職フェア」盛況

始興市が4月10日、正往洞の美観広場で「仕事(my job)を手に入れて明日(future)をつかもう」というキャッチフレーズの下、「2014年始興市大規模就職フェア」を開催した。今回の行事は京畿道有望中小企業やMTV入居企業など約70社が参加し、地域の優秀な人材を採用する面接も行われた。

この日、会場には行事開始前から求職者が次々と現れ、約1千3百人の求職者が会場を訪れて最近の就職難の一面をうかがわせた。今回の就職フェアでは会場の入口に求職者がわかりやすいように求人会社の採用情報を掲示し、会場内に参加企業の就職説明ブースを設けて求職者に求人情報を詳しく説明することにより、求職者が希望条件に合う会社を選ぶ上で大いに役立ったと評価された。

5月の行事は9日午後2時に正往洞の美観広場で開催される予定で、特に女性や中高年層のための仕事を70%以上確保し、就職弱者の就職連携に重点を置く計画である。

95周年三・一節記念式開催

さる3月1日、三・一独立運動記念碑のある君子小学校で95周年三・一節(独立運動記念日)記念式が開かれた。市の関係者と独立功労者の遺族、報勲家族、咸珍圭・趙正湜国会議員、崔在白道議員、始興市議会議員、学生、市民など、約200人が記念式に参加した。記念式は午前10時の開会宣言を皮切りに、殉国先烈および護国英霊に対する黙祷、三・一独立運動の経過報告、独立宣言書の朗読、記念の辞、三・一独立運動作文大会表彰、記念碑建設推進委員会宣布式、三・一節の歌斉唱および万歳三唱の順に挙行された。

記念式が行われた君子小学校には、1919年4月に始興市君子面一帯で起こった万歳運動を称える記念碑が建てられている。記念式が終わった後、君子面の三・一独立運動再現行事として三・一節精神継承行進も行われ、併催行事としては舞台太極旗手形押し、フェイスペイント、太極旗づくりなどが進められた。

タイムカプセル埋設新しい100年の出発

3月1日午後。始興ケッコル生態公園内時間の丘に、始興市民43万人の夢と希望の詰まったタイムカプセルが埋められた。始興ができから初めて公開されるタイムカプセル埋設式の歴史的な瞬間を、訪れた市民すべてが見守った。タイムカプセルの中にはこれまでの写真をはじめ、始興の歴史を見せてくれる資料と品物2,114点が詰め込まれた。会場は早くから市民でにぎわい、グラフィティパフォーマンス、始興100年写真展示会、手紙公募展受賞作の展示、個人タイムカプセル所蔵品など、様々な見どころが盛りだくさんだった。両親に連れられて会場を訪れた子どもたちは始興市を象徴するヘロ、トロと一緒に記念写真を撮りながら楽しんだ。埋設記念式は始興オウルリム合唱団と始興少年少女合唱団の公演で始まり、参加者と時間の丘へパレード行進して除幕式、下降式の式順で埋められた後、市民が直接参加する時間の丘への「夢の種まき」で締め括られた。

タイムカプセルが埋められた始興ケッコル生態公園の時間の丘では今後、100年を逆にカウントする「百年時計」と日増しに育つ「百年の木」が新しい見どころとして訪問客を温かく迎えてくれるだろう。

烏耳島ポケットパーク(サルマクキル)オープン

軍事保護地域として30年間立ち入り規制されていた烏耳島サルマクキルが市民に開放された。さる10日にオープンした烏耳島ポケットパーク(正往洞1073-13番地一帯)には、昔の烏耳島砂浜の情趣を感じながら歩ける散策路や展望デッキ、東屋などが設置されている。

「サルマク」は梁(やな、韓国語で「サル」)という漁具を仕掛けて漁師が潮汐時間を見ていきながら休んだ臨時休憩場所のことで、烏耳島の昔の地名にその跡が残っている。

全体面積6,400㎡のポケットパーク(サルマクキル)にある舗装されていないデッキ散策路は、老若男女を問わず気軽に歩けるように安全で緩やかな道に造成され、特に昔の烏耳島海岸の姿をそのまま残している海辺は市民にまた別の楽しさを味わわせてくれるだろう。

共に築いていく女性にやさしい都市、始興

女性にやさしい都市(Women Friendly City)とは、地域の政策と発展に男女が平等に参画し、その恩恵がすべての住民に等しく行き渡り、女性を含めた社会的弱者の成長と安全が実現する家族にやさしい都市のことをいう。このような女性にやさしい都市は安全で便利な暮らし、参加とコミュニケーション、配慮が保障される都市となり、市民の日常生活から不便をなくして活力を与え、女性を中心として家族にやさしい環境が作られて地域共同体の活性化、仕事と家庭の両立を可能にし、住みたいまちにすることを追求する。

始興市は2010年に女性にやさしい都市に指定され、「共に築いていく女性にやさしい都市、始興」というビジョンの下、1. 地域社会の参加機会、日常生活の安全と便宜における公平性、2. 児童、高齢者、障害者のケアを住民と共有しながら図る女性の仕事と家庭の両立、3. 持続可能な方向で暮らしを促進する生態系にやさしい地域発展、4. 市民と対話して意見に耳を傾ける民主的かつ開放的な都市という4つのコアバリューを追求している。

国内基礎自治体の中で初めて「始興市男女平等基本条例」を制定し、市庁舎内に職員のための授乳スペースおよび妊婦休憩室を設けたほか、市民に配慮した駐車場の設置、小学校放課後助け合い保育の運営、環境にやさしいEM石鹸づくりなど、市民が肌で直に感じられるように様々な活動を実施した。

女性にやさしい都市づくりは官主導ではなく市民と一緒にコミュニケーションをとりながら進めていくものであり、継続的な市民の関心維持と市民参加の活性化に多少困難もあったが、女性にやさしい都市協議体の結成およびコミュニティカフェの活性化、市民を対象にした女性にやさしい都市の広報および男女平等教育の実施、市民ニーズ調査および住民宿願事業に対する提案の反映など、官民がコミュニケーションをとる中でこれを克服し、真の意味での女性にやさしい都市を築きつつある。

1998
VS
2013

「烏耳島の変身は無罪」航空写真で見る烏耳島の昨日と今日

1998年9月に撮影された烏耳島と2013年9月の烏耳島は非常に対照的。写真に見られる1998年9月の烏耳島は島と本土を陸続きにする埋立工事の完了後、商店街や共同住宅が一つ、二つとできはじめ、荒涼とした様子。烏耳島海洋団地という名前が恥ずかしくなるほど造成初期は人の往来があまりない空間だった。しかし、17年が過ぎた今、烏耳島は週末になると駐車スペースが足りないほど始興の中心的な観光地に浮上した。「島ならぬ島、烏耳島」は今、オーシャンフロントという新しい名前でさらなる変身を図っている。

1991
VS
2014

始興市公営開発事業第一弾「月串」の昨日と今日

月串公有水面埋立事業起工式(1992.11.20)の1年前にあたる1991年の月串と2014年2月現在の月串。23年という時間は、それこそ無から有を生み出す変化と激変の時間だったことを1枚の写真が物語っている。月串は始興の発展を加速するために設立された「公営開発事業所」の最初の事業だった。1992年の月串公有水面埋立事業起工式に続いて翌年の1993年には銀杏宅地開発事業の起工式が行われ、始興は本格的な開発に突入した。

1960 VS 2000

写真で見る始興の昨日と今日

1960年代の新川・大也・銀杏エリアと今日の姿が40年という隔世の感を感じさせる。モノクロ写真の手前に見える一番大きな建物が蘇莱小学校で、40年過ぎた今も同じ場所にあることが確認できる。1960年代までは新川洞を中心に中核的な地域商圏だった蘇莱面には、牛市場の「蛇川場」があった。近くの安山や安養、富川はもちろん、仁川からも牛を連れてきた牛商人がこの蛇川場で牛の取引を行い、蘇莱面の商圏が最も活気づいていたのはその頃だったという。